

現在のチベットの苦悩

世界制覇を狙う中国の犠牲になったチベット

中華人民共和国によるチベットの併合は、中国政府による「チベットの平和的解放」と呼ばれ、中央チベット政権による「中国によるチベット侵攻」およびチベットのディアスポラは、中華人民共和国（PRC）がチベットの支配権を獲得したプロセスでした。

これらの地域は、チベット政府による国際的な認知の獲得の試み、その軍隊の近代化への取り組み、チベット政府と中国との間の交渉、1950年10月のカム西部のチャムド地域での軍事紛争の後、中国の支配下に置かれました。

そして1951年10月に中国の圧力の下でチベット政府が十七か条協定を最終的に受け入れた。

いくつかの西側の意見では、中国へのチベットの編入は併合であった。

チベット政府とチベットの社会構造は、ダライ・ラマが亡命し、その後チベット政府とチベットの社会構造が解散した1959年のチベット蜂起まで、中国の権威の下でチベットの政治に留まりました。

チベットは、清がジュンガル汗国の軍隊を追放した後、1720年に中国の清王朝の支配下に置かれました。

それは1912年まで清の支配下にとどまった。

後継の中華民国は、チベットを含む清王朝が保有するすべての領土の相続を主張した。

この主張は、6歳のXuantong皇帝に代わって皇后DowagerLongyuによって署名された清皇帝の棄権の帝国判決で提供されました。

土地の継続的な領土保全5つのレース、満州、ハン、モンゴル、ホイ、チベットが中華民国になりました」。

仍合滿、漢、蒙、回、藏五族完全領土、為一大中華民國) 1912年に採択された中華民国の暫定憲法は、チベットを含む新共和国のフロンティア地域を国家の不可欠な部分として具体的に確立した。

1911年の辛亥革命後、現在のチベット自治区（TAR）を構成する地域のほとんどは、事実上独立した政体となり、他の中華民国から独立しました。

1917年までにTARがチベット政府の管理下に入る日。

チベット民族の人口が多い一部の国境地域（アムドとイースタンカム）は、中国国民党または地方の軍閥の管理下にとどまった。

TAR地域は「政治チベット」とも呼ばれ、チベット民族の人口が多い地域はすべて「民族チベット」と総称されます。

政治的チベットとは、1951年までチベット政府によって継続的に統治されていた政体を指します。

一方、民族的チベットとは、チベット人が歴史的に支配的であったが、現代に至るまで、チベットの管轄が不規則で特定の地域に限定されていた北と東の地域を指します。

当時、政治チベットは事実上の独立を獲得し、その社会経済的および政治的システムは中世ヨーロッパに似ていました。

1913年から1933年までのダライラマ13世によるチベット軍の拡大と近代化の試みは、主に強力な貴族や僧侶からの反対により、最終的に失敗した。

チベット政府は、事実上の独立の期間中、世界の他の政府とほとんど接触していなかった。

いくつかの例外を除いて。特に、インド、英国、および米国。[32][33]これにより、チベットは外交的に孤立し、国際社会によく知られている問題についての立場を確立することができなくなった。

1949年7月、中国共産党が後援する政治的チベットでの動揺を防ぐために、チベット政府はラサで（国民主義者の）中国代表団を追放した。

1949年11月、それは米国国務省に手紙と毛沢東にコピーを送り、英国政府に別の手紙を送り、チベットへの中国軍の侵入から「あらゆる手段で」身を守る意図を宣言した。。

過去30年間、保守的なチベット政府は意識的に軍隊を軽視し、近代化を控えていました。

近代化と軍隊の拡大の急いでの試みは、1949年に始まったが、両方の点でほとんど成功しなかったことが証明された。

効果的な軍隊を育成して訓練するには遅すぎた。

インドはいくつかの小型武器援助と軍事訓練を提供した。

しかしながら、人民解放軍はチベット軍よりもはるかに大きく、訓練され、指導力があり、装備が充実しており、経験も豊富であった。

1950年、ダライ・ラマ14世は15歳で過半数に達していなかったため、リージェント・タクトラがチベット政府の代行長を務めました。

ダライ・ラマの少数派の時代は伝統的に不安定性と分裂の1つであり、分裂と不安定性は最近のレッティングの陰謀と1947年の摂政紛争によってさらに激しくなった。

中国とその前身である国民党（ROC）は、チベットは中国の一部であると常に主張してきました。

中国はまた、神権的封建制度からチベット人を「解放」するというイデオロギー的動機を宣言した。

1949年9月、中華人民共和国の宣言の直前に、中国共産党（CCP）は、チベット、台湾、海南島、およびペスカドーレス諸島を中国に組み込むことを最優先事項としました。

平和的または強制的にチベットが事実上の独立を自発的に放棄する可能性は低いため、1949年12月、マオはチベット政府に交渉を促すために、カムド（チャムド）でチベットに進軍する準備をするよう命じました。

中国には100万人以上の兵士がお、最近終了した中国内戦からの広範な戦闘経験があった。

チベットと中国の間の交渉は、英国とインドの政府によって仲介されました。

1950年3月7日、チベットの代表団がインドのカリンボンに到着し、新たに宣言された中華人民共和国との対話を開始し、中国人がとりわけチベットの「領土保全」を尊重するという保証を確保しました。

会談の開始は、会談の場所についてのチベット、インド、イギリス、中国の代表団間の議論によって遅れた。

チベットはシンガポールまたは香港（北京ではなく、当時はローマ字化）を支持していました北京として）；英国はインドを支持しました（香港やシンガポールではありません）。

そしてインドと中国人は北京を支持した。

チベット代表団は最終的に1950年9月16日にデリーで中国の元大使YuanZhongxianと会談しました。

Yuanはチベットを中国の一部と見なし、中国がチベットの防衛に責任があるという3点の提案を伝えました。

中国はチベットの貿易と対外関係に責任があります。

受け入れは、平和的な中国の主権、あるいは戦争につながるでしょう。

チベット人は、司祭-後援者の一人として中国とチベットの間関係を維持することを約束しました。

チベットは現在のように独立したままであり、私たちは中国と非常に緊密な「司祭-後援者」関係を持ち続けるでしょう。

また、チベットにはイギリス、アメリカ、国民党の帝国主義者がいないため、チベットを帝国主義から解放する必要はありません。

チベットはダライ・ラマ（外国勢力ではない）によって統治され保護されています。

彼らと彼らの代表であるTseponWD Shakabpaは、9月19日、実施に関するいくつかの規定とともに協力を勧告した。

中国軍はチベットに駐留する必要はありません。

チベットは脅威にさらされておらず、インドやネパールに攻撃された場合、中国に軍事援助を求めることができると主張された。

ラサが審議している間、1950年10月7日、中国軍はチベット東部に進出し、5か所で国境を越えました。

目的は、チベット自体を侵略することではなく、チャムドでチベット軍を捕らえ、ラサ政府の士気をくじくため、交渉者を北京に派遣してチベットの引き渡しの条件に署名するよう強い圧力をかけることであった。

10月21日、ラサは代表団に対し、共産党政府との協議のために直ちに北京に向けて出発し、ダライラマの地位が保証される場合は最初の条項を受け入れ、他の2つの条件を拒否するよう指示しました。

後に、チベットが外国の支配下に置かれるため、6本の腕を持つマハーカーラの神々が3つのポイントを受け入れることができないことを示す前の占いの後、最初の要求の受け入れさえも取り消しました。

何ヶ月にもわたる交渉の失敗、[57]外国の支援と支援を確保するためのチベットによる試み、中国とチベット軍の増強、人民解放軍（PLA）は1950年10月6日または7日にジンシャ川を渡った。

2つのPLA部隊がすぐに数の多いチベット軍を取り囲み、10月19日までに国境の町チャムドを占領した。

その時までには114人のPLA兵士と180人のチベット兵士が殺害または負傷した。

1962年に書いた張国華は、「5,700人以上の敵が破壊され」、「3,000人以上」が平和的に降伏したと主張しました。

活発な敵対行為は、Gyamo NgulChu川の北東と西経96度線の東の国境地帯に限定されていました。

チャムドを占領した後、人民解放軍は敵対行為を打ち切り、捕らえられた司令官、ガボをラサに派遣して交渉条件を繰り返し、チベットの代表が北京への代表を通じて返答するのを待った。

人民解放軍は、解放された囚人（その中でも、カムの総督、ンガブー・ンガワン・ジグメ）をラサに送り、人民解放軍に代わってダライ・ラマと交渉した。

中国の放送は、チベットが「平和的に解放された」場合、チベットのエリートは彼らの立場と権力を維持できると約束した。

中国がチベットに侵攻してから1か月後、エルサルバドルは国連でチベット政府による苦情を後援しましたが、インドと英国はそれについての議論を阻止しました。

チベットの交渉担当者は北京に派遣され、一般に十七か条協定と呼ばれる完成済みの文書が提示されました。

中国の代表団による交渉はありませんでした。

中国は、チベットが独自のペースで独自の方法で改革することを可能にし、内政を自治し、宗教の自由を認めると述べたが、また、中国の一部であることに同意する必要があります。

チベットの交渉担当者は、この重要な点について政府と連絡を取ることを許可されておらず、政府の名の下に署名する許可が与えられていなかったにもかかわらず、1951年5月23日に合意に署名するよう圧力をかけられました。

これは、チベットの歴史の中で、両国の共有された歴史に対する中国の立場を、不本意ながらも、政府が受け入れたのは初めてのことでした。

北京と中国政府のチベット代表は1951年5月23日に十七か条協定に署名し、政治チベットにおける人民解放軍の存在と中央人民政府の統治を承認した。

署名する前にチベット政府との合意の条件は明確にされておらず、チベット政府は文書を書面で受け入れるのが良いのか、亡命するのが良いのかについて意見が分かっていた。

この時までには王位に就いたダライ・ラマは、亡命しないことを選択し、1951年10月に17ポイント協定を正式に受け入れた。

チベットの情報筋によると、10月24日、ダライ・ラマに代わって、張経武將軍がマオゼドンに電報を送った協定の支持を確認し、ンガブー・ンガワン・ジグメが単に張に来て、チベット政府が正式なダライ・ラマの承認の代わりに電報を送ることに同意したという証拠があります。

その後まもなく、人民解放軍はラサに入った。

その後のチベットの編入は、国営メディアによって宣伝されているように、中華人民共和国では「チベットの平和的解放」（中国語：和平解放西藏地方Hépingjiěfàngxīzàngdìfāng）として公式に知られています

数年間、チベット政府は、1950年にPLAによって占領されたチャムド周辺の地域を除いて、敵対行為の発生前に統治していたチベットの地域に留まりました。

解放委員会とチベット政府の管理外。[78]この間、チベット政府の下地域は中央政府からの高度な自治権を維持し、一般的に彼らの伝統的な社会構造を維持することを許可された。

1956年、チベット自治区のすぐ外にあるカム東部の民族チベット地域のチベット民兵は、農地改革における中国政府の実験に刺激されて、政府との戦いを開始しました。

民兵が団結してチュシガンデュルクボランティアフォースを結成した。

1959年3月に戦闘がラサに広がったとき、ダライラマは3月17日に6人の閣僚を含む20人の側近と共にラサを去り、チベットから逃亡した。

ダライ・ラマがラサを去ってから安全や行方のニュースがなかったため、多くの人が殺害されたと考えていました。ラサでは、チベット人と中国軍との3日間の戦闘で2,000人以上が死亡したと推定されています。

彼がヒマラヤ山脈を歩いて15日間旅した後、ケンジマナ峠で国境を越えてインドに入ったことが1959年3月31日によく報告されました。

その後、ダライ・ラマ法王とチベットの中国政府の両方が17点協定を拒否し、チベットの中国政府はチベット地方政府を解散させました。

この行動の遺産は今日まで続いています。